

第二回 北杜市消防団活性化検討委員会会議録

1 会議名

第二回 北杜市消防団活性化検討委員会

2 開催日時

平成27年3月27日(金)

3 開催場所

市役所大会議室

4 出席者

委員：清水康男・麻川 仁・篠原芳英・茅野光一郎・鈴木猛康・利根川 昇・
古屋賢仁・長坂 正・室田泰文・三井 茂・井口哲郎・千野憲治・小林健展
内藤歳雄・三井正樹・清水章弘・鈴木喜治・高橋 隆・小野忠男・高垣直威
赤岡晴人・篠原章雄・丸茂敏樹
北杜市：地域課長・防災指導監・消防防災担当

5 会議次第

(1) 開会

(2) 議事

北杜市消防団の課題等について
その他

6 公開・非公開の別

公開

7 非公開の理由(会議を非公開とした場合に限る)

8 傍聴人の数(会議を公開とした場合に限る)

なし

9 審議内容

会議次第(2)議事

北杜市消防団の課題等について

事務局：前回の意見を報告

委員長：前回の会議では、団員の減少と地域の不安が取り上げられていた。団員の減少について感じていることをいただきたい。

委員：市民が安心して暮らすには消防団がそばにすることが大切。いかにして地域が支えるかということ。

委員：私は入るのが当たり前。欠員が出れば入らなければいけないというような雰囲気

気の中で入団した。だいぶ環境が変わってしまっているんだと感じる。

委員：人はいても入ってくれないという現象があり、それで苦労する。親の考え方もかわってきた。

委員：うちの地区は、若い人たちもみんな他町村へ家を建てて出てしまっている。残っている人たちに勧めているが親が反対する。子どもに直接聞いても「父親に聞かなければわからない」というようなことがかなりある。子どもが親離れしていないのではないのか。

委員：県内どの自治体でも消防団の位置づけが重要になっている。地域の中での消防団の役割をしっかりとやっているところはうまくいっている。新潟県見附市では主に防災啓発活動を担当している。女性団員の活躍のようすが知られば男性団員も増えるのではないのか。参加することが楽しい・いいことがあるという雰囲気を作ってあげることが必要。

委員：人口減を解決することはむずかしい。OBに再度入団してもらうような形にして打開策にできないか。即戦力になるのでひとつの方法になると思う。

委員長：団員のほとんどは昼間いない。「OBを」という声は、数多くあったように感じている。

委員：消防団に定年はあるのか？

事務局：条例上はない。定員の関係で部長まで行ってまた一般団員にという例はある。

委員：消防団経験のある親なのに子どもを入れない。集団行動が好きではない人が多くなっている。それはもう、ひとつの流れでしかたないこと。

サラリーマン団員が81%だが、名前だけの人はどれだけいるのか？

前は会社でも出勤させてくれたが今はそうではない。主体になるのはJAや公務員で、実際のところ団員の20%くらいでは火事は消せない。おぎなうならば、OBの活用と思う。現場で働ける人を確保することが第一。

住民の中には「峡北消防があるから火事は消える」という人もいる。そんな認識を変えることも必要。

委員長：「親が団員だったり、消防職員であっても入らない」とのこと。根本は世の中の流れだと思うが、「安全のことを考えるといたくない」とか、勤務形態などもるもるの要因があろうかと思う。

委員：子どもが少ないし、「勉強ができないのは学校が悪い」というような親が入れるかといえば入れない。私達は自分がやってきたから、子どもに対して「消防は家にいる限りは入るんだよ」という教育をしてきた。

委員：北杜市の消防団が県下最大の団員を持たなければならない理由は？定員が多いからみんなが悩んでいる。定数を減らすのは難しいように思うけれども...

委員：合併のころは団員2,200。今は1,780程度。地域が広く、集落が点在しているので、応援のエリアが広がってしまう恐れがある。

委員：現役団員の立場からすると、数が勝負という感じがする。定数を減らし、団員が減ってってしまうのも心配。

委員：日中動ける団員をある程度確保しておかないとたいへん。最低でも3人いないと機械は動かせない。日中にポンプを動かせる人を確保してほしい。

委員長：夜間は充足されているが、昼間をどうするか。外に出ている人が多い時間帯の対応をどうするのか、定数はよしとしても昼間をどうするかということが課題とを感じる。

委員：私は日中家にいるので手伝いたいという気持ちはある。ホースでも運ぶけれども、命令がないところでやるのは消防団の統制がとれなくなるだろうから、そういった制度が欲しい。そういうものを制度として作って行くとかしないとか今の解決策は見えてこないという気がする。

目の前に火災があって、人が足りなければいくらでも手伝います。団員の側から「お願いします」をいわれないと、統制をみだしてはいけないという重いがある。

委員長：昼間をどうするかをみんなうれている。今後とも検討、また、市としてもそういった方向性がいいのか、消防団の幹部の皆さんにも意向をきいて円滑に進めていく必要がある。基準や決めごとを作って円滑な関係を作ってもらえないか。そういった制度の研究もひとつの課題。

委員：消防団員は人員が足りない場合には一般の民間人を徴用してもよい、そうすると公務災害の対象になるはずなので、団員が一声かけてその旨を上部に伝えるということを団の役員も理解した上で活動したらいいのではないか。

委員長：火災とか救急で民間人が協力した場合には消防法の中で補償があって対応できますね？ できます。

それらも含めて団員OB制度を創設するようになった場合に、公務災害補償が団員と同じように対応してもらえるかどうかとか、そういったバックボーンをしておかないと好意を無にするようなことになるので、確認をお願いしたい。

委員：消防に入ったら、会社のほうに「私は消防に入りました」というようなことを言ってもらえるようなシステムができればいいかと思う。地域の消防団の団長さんとかそういう人たちの名前で、団員の事業主に「もし万が一の時には消防団へのご配慮をお願いします」というような文書ができれば理解が進むのかと思う。

あとは、業務中に火事があって出動した職員がけがをした場合は労災になるのか、ならないとすれば業務ではないとか、そういった労働のほうの法律のほうのところもはっきりしてもらえば会社とすれば理解ができるだろうと思う。

委員：企業に対し、消防団としてどんなアプローチをしているのか。企業に常にアプローチをかけて、社員が入ったときに「できれば消防団に入ってくれ」と企業のほうからいわせるといような取り組みが必要と思う。「有事の時には企業のほうから出します」といようなコンタクトが取れているような体制づくり、出動できる体制づくりが必要だと考える。

私としては、会社に入る時点で「消防団に入るならば採用します」、そこまではないにしても、もっと踏み込んだ活動というものを会社にアプローチしてもいいと思ってる。

委員：消防団員確保のための過程として、大学とかいろいろなところへ恩恵を持ちながら消防団へなるべく入ってくださいということを推進はしている。

委員長：企業へのアピール、「ことがあったら対応してくれ」という雰囲気があれば出られる、そのためには行政なりが働きかけをしていかないと無理だと思う、今後のいい課題と言うことで前向きにお願いしたい。

委員：今の防災無線は聞きにくいという意見が多い。実際に火事や災害が起きたときの伝達に不都合が生じると「何のためのデジタル化」ということになってしまうので、具体的な対応をとったほうがいいのかと思う。

委員：団員が減ってくるなら、シニアや女性を増やしていこうという話と思う。新入団員増加の一策として、長野県の下条村では村営住宅の入居条件として消防団加入を義務づけている。家賃を安くするから入ってはどうか？

自主防災会は区長さんが代表を兼ねているので、だんだん不活発になってしまいうような気がしている。もっと消防団と連携して、機器の扱いなどを練習すること、服装などで自主防災組織のメンバーということがはっきりわかるようにしておけば連携しやすいのではないかな。

委員：なんとか自分のところにも自主防災組織をと思うのだが難しい、それが事実。区長会などでアプローチしている。消防団からのアプローチも必要では。地域にも「動きたい」と思っている部分はあるのだが、消防団にも動いてほしいと思っている部分がある。

委員長：自主防の活性化・団員OBで手薄のところを補ってもらう・女性の消防団員には火災予防や救急講習をしてしてもらおうというような取り組みで消防団全体を覆い包んで住民にもプラスになるような女性団員ができればいい。

委員：これから子どもが減っていく、入る人が減っていくのは確実なこと、団を維持するにはいる人をどれだけ入れていくかということになってくる。小学校・中学校でアピールして「自分たちが守る」と意識づけしていくことが大切。

委員：地元の中学校では、春・秋に団員に講師としてきてもらっている。

委員：どれだけ小さな時から刷り込めるか、子どもの安全を取り上げると親も夢中になる。

委員：基本に据えるのは、消防団をどうするかということ。付随する問題として地域の消防力をどう高めるかということ。

このふたつの方向性は同じだが、ステージ的にはちょっと違う。次回はステージをしばればスムーズにいくのでは。

人数が少なくなるのは全国的な傾向、なら、どうするかというところ。代替案として女性の組織化ができないかということとか、若年からの意識づけで将来的な予備軍としていこうということがあったと思う。

団員をどうするかが数だけの問題になってしまうのはどうなのでしょう。消防団員の適正な数というのがあって、まず、地域を守るために団員がどれだけいればいいかというのが基本。条例の定数を減らすという考え方も成立するが、減らしたことが消防力の低下につながるのはいや。

なぜ、消防団員になりたがらないのかも考える必要がある。消防団の活動が外から見えにくいということがある。それで「入って」といわれたときに何を心

配するかというと「何をするんだ」ということ、「これから何をしたらいいんだろう」という基本の形をわかりやすく示すということがあると思う。活動をシステムティックに見える形にしていかないと理解は得られにくいのではないか。手順をわかりやすく示すことも、わかる人がいなくなったときの統率・継続性を保つために必要。

昼間の機能としてはOBの方に協力してもらうことも機能を保つために必要PR、広報で団員を紹介すると、周囲からの評価がモチベーションにつながる。若年者向けの話もそうだが、最終的には、昔は当たり前だった互助の精神の重要性をとただけでは理解してもらえなくなってしまった。郷土愛も表に出せない時代、そのあたりを固めながら説得するしかないのではないか。

委員長：御意見を今後の検討にいかしていきたい。

今日は前回の振り返りから消防団の課題についての意見をいただいた。

委員：今日の内容を整理してもらいたい。

事務局：次回に準備

委員会：第三回は今日の意見を叩き台に内容を狭めながら目的達成に向かいたい。